

～すべての児童生徒の学力向上を目指して～

学力診断テスト等の結果と小中連携アンケートからみた授業改善

平成 29 年度乙訓学力向上対策会議

平成 30 年度に向けて各校の実践に役立てるため、乙訓の児童生徒の学力についてまとめました。

【府学力診断テストや全国学力・学習状況調査から】

- ・経年比較
- ・同じ児童生徒に焦点をあてた調査
- ・質問紙と関連づけて

【小中連携アンケートから】

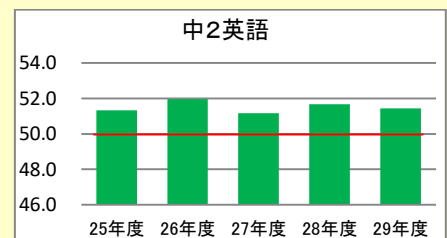
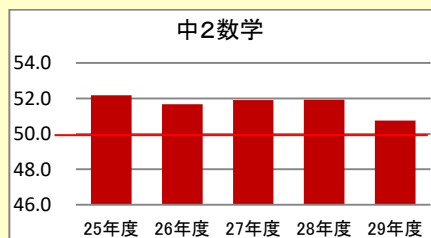
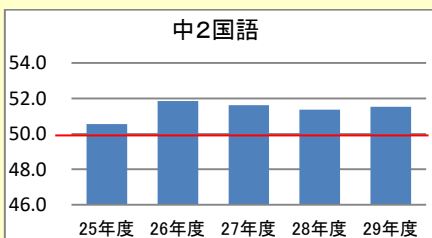
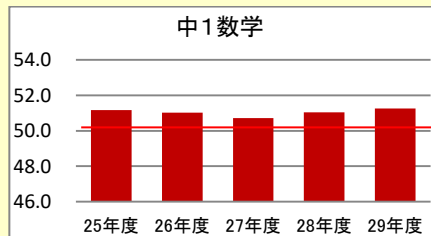
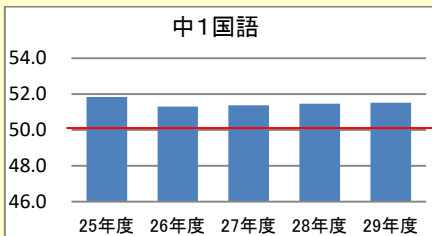
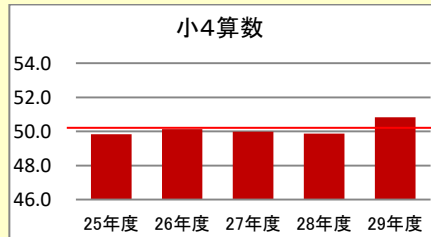
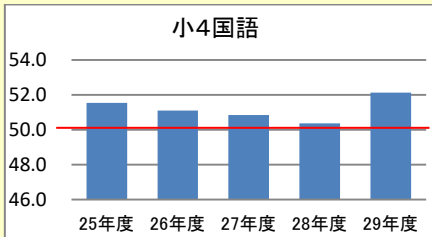
- ・小中連携で効果のあった取組
- ・小学校 1～3 年の授業で大切にしていること
- ・すべての子どもの学力向上に向けて

これらの結果から乙訓の特徴を分析し、それに応じた授業改善の視点を 5 つにまとめました。



京都府学力診断テストから ①

① 過去 5 年間の経年比較（府の平均正答率を 50 として標準化した数値）

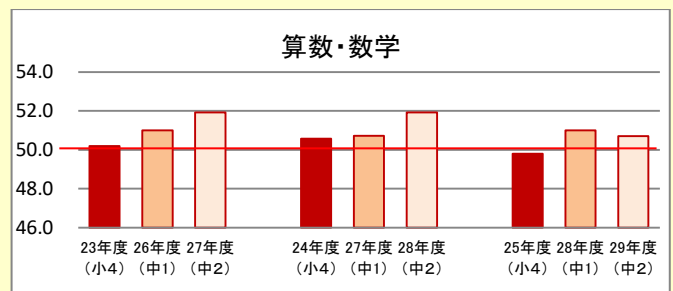
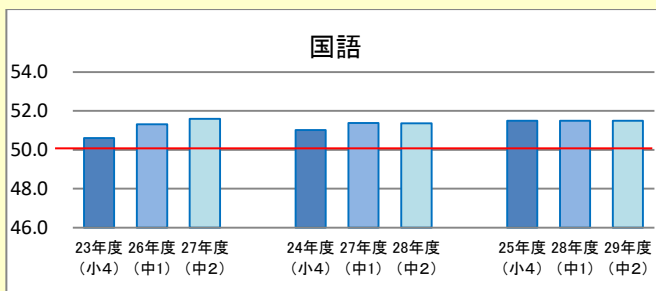


過去 5 年間の推移を学年、教科ごとにグラフで表しました。

【乙訓の特徴】

- ・年度によって少しずつ変動がありますが、小学 4 年算数を除き、どの年度も府の平均を上回っています。
- ・小学 4 年算数は他に比べ府の平均を下回る年度が多いですが、中学 1 年ではすべて府の平均を上回っています。小学校後半（4～6 年）で伸びていることがわかります。
- ・29 年度は小学 4 年算数も府の平均を上回り、すべての学年、教科で府の平均正答率を上回っています。

② 同じ児童生徒に焦点をあてて（府の平均正答率を 50 として標準化した数値）



中学 2 年生の生徒が、中学 1 年当時、小学 4 年生当時はどのような学力状況であったか、過去 3 年間に調べました。

【乙訓の特徴】

- ・国語は、学年進行によって伸びている、または高い水準を維持しています。
- ・算数は、28 年度中学 1 年→29 年度中学 2 年を除くと、学年進行によって着実に伸びています。

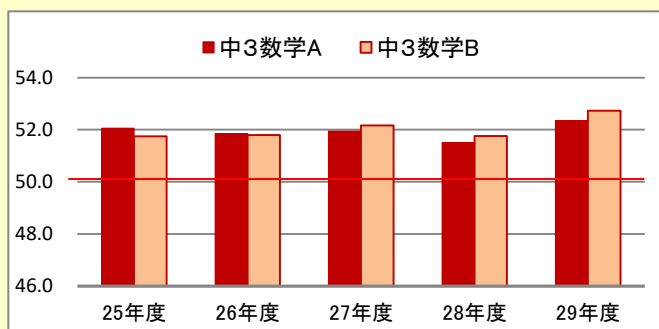
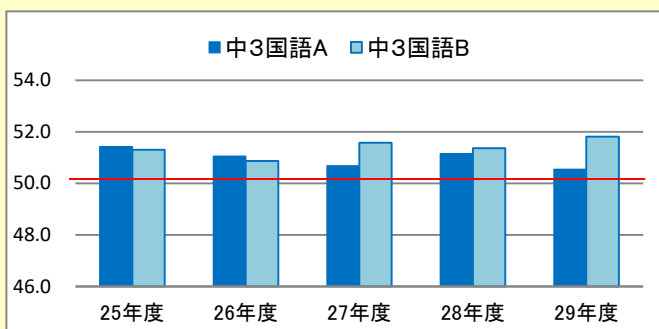
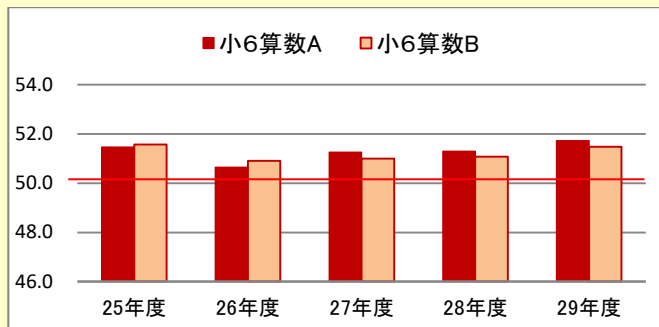
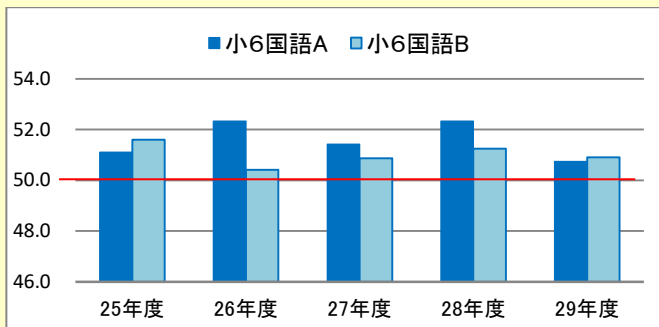
授業改善の視点 ①



これらの結果から、乙訓全体は総じて学力が高いと言えます。
 一方、小学 4 年算数を学校単位で見ると年度によって 7～10 校の学校（乙訓管内のおよそ半数の学校）が府の平均正答率を下回っています。
 自校の結果を府や乙訓と照らし合わせたり、小学校では中学 1 年との学力状況を比べたりしながら、分析を進めてほしいです。その中から成果と課題を整理し、日々の授業で大切にすることを全教職員で共通理解して実践したいものです。

全国学力・学習状況調査から

① 過去5年間の経年比較（府の平均正答率を50として標準化した数値）

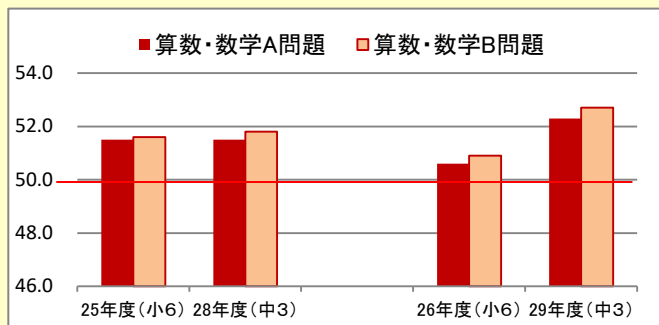
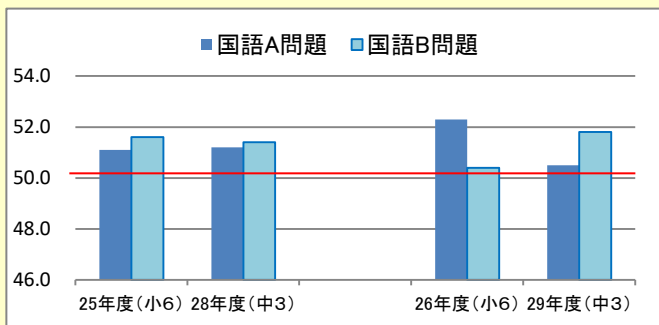


過去5年間の推移を学年・教科、問題別ごとにグラフで表しました。

【乙訓の特徴】

- ・学年・教科、A問題B問題、どの年度も府の平均を上回っています。
- ・中学3年数学はA問題B問題ともに他と比べ、高い水準を保っています。
- ・中学3年は、27年度からB問題の正答率がA問題の正答率より高い傾向が続いています。

② 同じ児童生徒に焦点をあてて（府の平均正答率を50として標準化した数値）



中学3年生の生徒が、小学6年生当時はどのような学力状況であったか、過去2年間を調べました。

【乙訓の特徴】

- ・28年度中学3年国語は、A・B問題ともに大きな変化はありません。
- ・28年度中学3年算数・数学は、A・B問題ともに大きな変化はありません。
- ・29年度中学3年国語は、A問題が下がり、B問題が伸びています。
- ・29年度中学3年算数・数学は、A・B問題ともに伸びています。

授業改善の視点 ②

府の学力診断テスト同様、乙訓全体は、総じて学力は高いと言えます。

その中でも中学3年の数学はA問題B問題ともに高い水準を保っています。また29年度中学3年数学は、26年度小学6年算数に比べ、かなり伸びています。

中学校数学の授業実践で大事にしていることや共通理解していることなど成果につながった具体的な手法について、小中連携会議等で協議してはどうでしょうか。

乙訓の特徴の一つである「小学4年算数が他に比べて低い」という点について、これらの協議を通して解決のヒントが見つかるかもしれません。自校の実態に合わせながら、実践に活かしてほしいです。

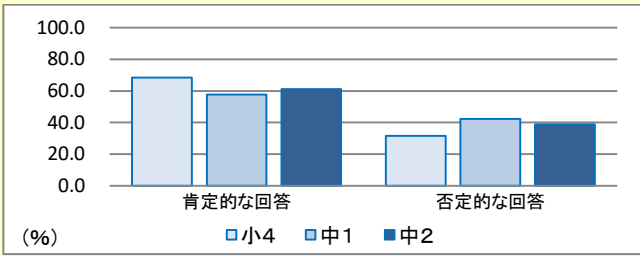


京都府学力診断テストから ②

29年度の児童生徒質問紙の項目「国語の勉強は好きだ」「算数の勉強は好きだ」の回答結果とテスト結果（国語・算数）について、乙訓全体を2つのグループに分け、それぞれ関連付けて分析しました。

① 「国語の勉強は好きだ」

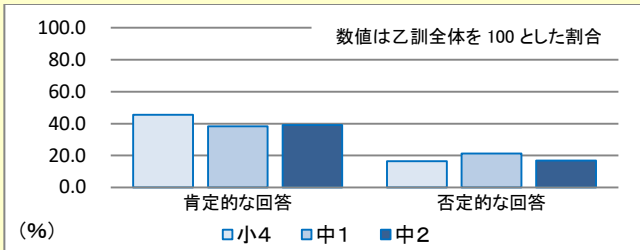
【乙訓局全体の児童生徒の回答】



【乙訓の特徴】

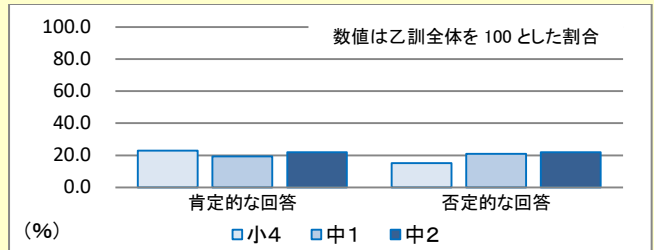
- 小学4年で70%弱、中学1・2年で60%前後の児童生徒が肯定的な回答をしています。この数値は府全体と比較すると、小学4年(+1.7)、中学1年(+4.5)、中学2年(+3.2)という結果で、どの学年も、肯定的な回答は府と比べ高いです。

【府平均正答率を上回る児童生徒のグループの回答】



- 学年進行とともに肯定的な回答が減少（-約6%）

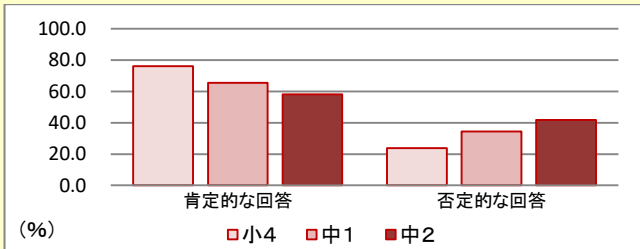
【府平均正答率を下回る児童生徒のグループの回答】



- どの学年も肯定的な回答が20%前後
- 学年進行とともに否定的な回答が増加（約7%）

② 「算数の勉強は好きだ」

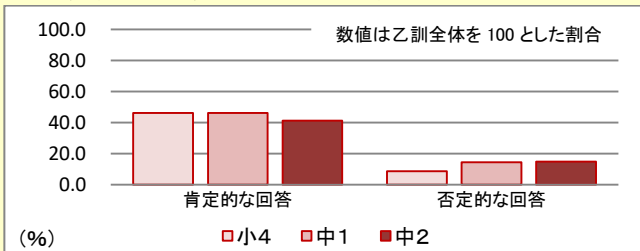
【乙訓局全体の児童生徒回答】



【乙訓の特徴】

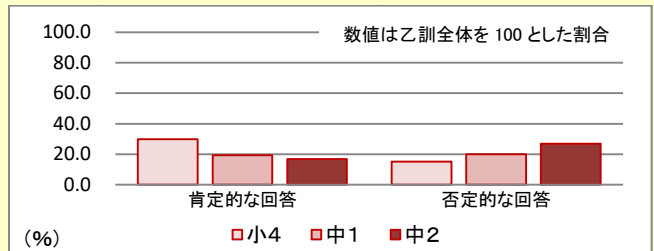
- 小学4年で約75%、中学1年で約65%、中学2年で約60%の児童生徒が肯定的な回答をしています。この数値は府全体と比較すると、小学4年(-3)、中学1年(+2.1)、中学2年(+4.5)という結果です。
- 学年の進行によって、肯定的な回答が減少しています。

【府平均正答率を上回る児童生徒のグループの回答】



- 学年進行とともに肯定的な回答が減少（-約5%）

【府平均正答率を下回る児童生徒のグループの回答】



- 学年進行とともに肯定的な回答が減少（-約13%）
- 学年進行とともに否定的な回答が増加（約12%）
- 小学4年の肯定的な回答は約30%

授業改善の視点 ③



国語・算数ともに肯定的な回答の割合は、府平均正答率を上回る児童生徒のグループの方が高いです。「国語（算数）が好きで、学力が定着している」実践の成果の一つといえます。

一方、府平均正答率を下回る児童生徒のグループ内にも、肯定的な回答をした児童生徒が約20～30%います。この数値は、府平均正答率を下回る児童生徒の約40～65%にあたります。「国語（算数）の授業が好きだけど、学力が定着しにくい」児童生徒の実態があらわれています。

また、学年が上がるにつれて肯定的な回答が減り、否定的な回答が増える傾向もみられます。どの子にも学力の定着を実感させ、学習意欲を高める授業を目指したいものです。

「小中連携等の推進に関するアンケート」から

学力向上対策会議で「小中連携等の推進に関するアンケート」を行いました。その中で、多かった意見・参考になる意見をまとめました。

今年度、小中連携で効果のあった取組

- ・合同研修（授業、テスト分析、生徒指導等）
- ・体験活動（部活動、授業）
- ・生徒会の交流等

【乙訓の特徴】

合同研修は、実態に応じて様々なテーマで行われています。今年度は中学校給食の実施に向けた研修が行われました。実態に応じて研修テーマが、年々変わっていくことがわかりました。



小学校1～3年の授業で大切にしていること（主に算数）

- ・基礎基本の定着
- ・児童が考える場面をつくる。
- ・自分の考えを表現する。
(ペア・グループ学習などを取り入れて)
- ・具体物を活用して視覚的にわかりやすくしたり、体験させたりする。

授業改善の視点 ④

各校が実態に応じて、資質・能力の3つの柱「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成に向けた実践に取り組んでいることがわかりました。

単元によってどの資質・能力に重点を置くかわかりますが、それぞれの単元で育成する資質・能力を指導計画の中に位置づけることで、毎時間のねらいが明確になります。1時間の授業が単元のどこにあたるかを意識することが大事です。

すべての子どもの学力向上に向けて授業で気をつけていること

【授業を組み立てる時に】

- ・苦手な子どもに焦点をあてた授業づくり
- ・連続性のある授業（導入で前時の内容をおさえる等）
- ・子どもが「わかる」を体感できる授業づくり

【授業の中で】

- ・丁寧な机間指導
- ・わかりやすく話す。
- ・視覚に働きかける。（具体物、ICT活用等）
- ・ヒントカード（自力解決の補助として用意）
- ・ペアやグループ学習

【環境等】

- ・座席の配慮（安心して学習できる席、集中して学習できる席に座らせる等）
- ・わからない時に「わからない」と素直に言える学級・人間関係づくり

【乙訓の特徴】

多くの学校で「机間指導」を大事にしていることがわかりました。子ども達が学習課題を把握しているか、学習に取り組んでいるかをすぐに確認し、必要に応じて指導・支援していることがわかりました。

児童生徒の実態に応じて、教材教具の工夫など様々な指導・支援も行われています。

授業改善の視点 ⑤

時間内に課題が終わるように子どもの実態に応じて問題数を変え「できる・わかる」体験を積み重ねて自己有用感を高めたり、安心して学習ができるような人間関係づくりに努めたりと、生徒指導の視点も大事なポイントです。

また、「どの子もわかる」授業づくりや、子どもが「何に困っているのか」を的確に把握し、それに対する「指導上の工夫の意図」を理解して「手立て」を検討し指導する特別支援教育の視点も大事なポイントの1つです。

授業を考えるときは、様々な視点を持つことが重要です。



まとめ 授業改善の視点について（5つ）

- ① 自校の学力診断テストの分析と活用
- ② 良い実践から学ぶ。
- ③ 子どもの意識と学力の関係を大切にする。
- ④ 資質・能力の何を身につけるか、単元指導計画に位置づける。
- ⑤ 生徒指導、特別支援教育等、様々な視点で授業を組み立てる。

学校の実態に応じて授業改善を！

